

《研究ノート》

## 英詩註解—ロマン主義時代の剣闘士詩（1）

笠 原 順 路

本稿は、平成20（2008）年度明星大学特別研究員制度による研究の成果の一部であり、平成22年6月5日に早稲田大学において行われた第29回イギリス・ロマン派講座において発表した原稿に基づいている。

### 【1】 序

#### 〔1〕「剣闘士詩」の定義

ローマのカンピドリオ博物館所蔵の「瀕死の剣闘士（The Dying Gladiator）」（別名「瀕死のガリア人（The Dying Gaul）」）像（図版1）またはその複製に関する詩行を、本稿では「剣闘士詩」と呼ぶ。



図版 1 FreeStockPhotos.com より

#### 〔2〕彫像としての「瀕死の剣闘士」の履歴

ハスケルとペニーによると、この像が文献上で初めて登場するのが、1623年に作成された、ルードヴィシ枢機卿（Ludovisi）収蔵物目録であることから、その直前に発掘されたものと推測されている。ルードヴィシ邸の敷地は、サリュスト（Sallust）庭園の一部であり、そこは、その後の調査で、古代の重要な遺物が多数埋蔵されていたことが判明している。その後、二度ほど借財の担保となっていた時期もあるが、基本的にルードヴィシ家で所有していて、1737年に教皇クレメント十二世がルードヴィシ家の子孫から購入し、カンピドリオ博物館に保管される。1797年にトレンティーノ（Tolentino）条約により、戦勝国

フランスに没収され、1800年11月から1815年10月までルーヴルで展示され、ナポレオン  
の没落後、再びカンピドリオ博物館で展示されて今日に至っている。

作者に関しては、プリニウス (Pliny) が『博物誌』で、ツェシラス (Ctesilas、アテネ  
の彫刻家でフェイディアス Phidias と同時代) と指摘している (34:74)、18-19 世紀ではヴ  
ィンケルマン (Winckelmann) を筆頭にその説が信じられていた (Winckelmann, p. 12)。  
19 世紀末以降は、紀元前 278 年にヘレスポント海峡を越えて小アジアのペルガモン (Perga-  
mon) 王国に侵入したガリア人を、アッタロス (Attalos) 王が迎え撃ったのを祝して建て  
られた青銅製の戦勝記念碑 (彫刻家エピゴヌス (Epigonos) の作で、現存しない) の一  
部を、後代のローマ人が大理石で複製したものとされている。

モデルとなった男に関しては、発掘された当初から「剣闘士」と呼ばれていたが、ヴィ  
ンケルマンが「剣闘士」説に疑問を投げかけ「伝令士」説を唱えてから、「喇叭吹き」、「ガ  
リア人」など諸説が出た。本稿では、ハスケルとペニーに倣って、「瀕死の剣闘士」と呼  
ぶ。(Haskell & Penny, pp. 22-27)

### 【3】庭園彫像としての「瀕死の剣闘士」像

18 世紀には 1743 年のラウシャム (Rousham) 庭園を皮切りに複製が多数作成され、多  
くは庭園の彫像として置かれていた。筆者の調査によると、現在ヴェルサイユ (Ver-  
sailles) 宮庭園、ブレニム (Blenheim) 宮庭園、ラウシャム庭園、ザイオン邸 (Syon  
House) に「瀕死の剣闘士」像が置かれていて、さらに嘗てはハグリー (Hagley) 庭園、  
ストウ (Stowe) 庭園、スタドリー・ロイヤル (Studley Royal) にも置かれていたが、何  
らかの理由で撤去されたことが分かっている。

詩における庭園彫像としての「瀕死の剣闘士」への言及はジェイムズ・トムソン『自由』  
(James Thomson, *Liberty*, Part IV Britain, 1735-36)、アレグザンダー・ポープ『バーリン  
トン伯爵への第四書簡体詩』(Alexander Pope, *Epistle IV to Richard, Earl of Burlington*,  
1736)、R. A. ミリケン『川岸』(R[ichard] A[lfred] Milliken, *The River-Side*, Book II, 1807)  
などに散見されるが、これらは、庭園のなかに単にその像があるということしか述べられ  
ておらず、「ロマン主義時代の剣闘士詩」の考察からは除外する。

## 【II】From William Hayley,

*An Essay on Sculpture, in a Series of Epistles to John Flaxman (1800) :-*

### 【1】作者略伝

ウィリアム・ヘイリー (William Hayley): 詩人。1745 年チチェスターで生まれ、イート  
ン、ケンブリッジで教育を受ける。主著は、友人のジョージ・ロムニー (George Romney)  
に宛てた『高名な画家への書簡体詩』(*Poetical Epistle to an Eminent Painter*, 1778)、『気質  
の勝利』(*The Triumphs of Temper*, 1781)、『ミルトン伝』(*Life of Milton*, 1796)、『クーパー  
伝』(*Life of Cowper*, 1803)、『音楽の勝利』(*Triumph of Music*, 1804) など。18 世紀末の文人  
と広い交流があり、特にウィリアム・ブレイク (William Blake) やシャーロット・スミス  
(Charlotte Smith) のパトロンでもあった。トマス・ウォートン (Thomas Warton) の死  
去に際して桂冠詩人へ推挙されるが、辞退した。1820 年フェルパムで没する。引用のもと

になったのは、交流のあった彫刻家ジョン・フラックスマン (John Flaxman) に宛てて、彫刻家の心得や藝術論一般を述べた書簡体詩。

## [2] 原文

Yes, Attic Art! Each change of vital breath,  
Of life the fervour, and the chill of death,  
All, all were subject to thy glorious power; 520  
Nature was thine, in ever-varying hour:  
Witness that offspring of thy skill profound,  
Thy Gladiator, bending to the ground,  
In whom the eye of sympathy describes  
His brief existence ebbing as he lies! (Epistle III, ll. 518-25)

## [3] 日本語訳

然り、アッティカの藝術よ。生ある息づかいの一つ一つが、  
生命の熱情、死の悪寒の一つ一つが、  
それら全てが、汝の栄えある力に従っていたのだ。 520  
時々刻々と流転してゆく万象が汝のものだった。  
見よ、汝の深遠なる技の申し子を、  
汝が造りし剣闘士を。身をかがめ、大地を向いた  
その姿に、同情の目が認めるのは、  
横たわる男の躯体から引いていく、命の潮。

## [4] 語釈

518ff: 彫像を作成した、古代アッティカの藝術に対して、二人称で呼びかけている。Attic Art = the art of sculpture.  
519 Of life the fervour: [each] fervour of life. この語順にすることで chiasmus (交差配列法) となる。  
521 Nature: 本来は、「(造物主によって創造された) 地上のもの全て」を指す。  
518-21: 像の写実性を讃えている。  
524 the eye of sympathy: 瀕死の剣闘士像を見ている観察者が同情を感じている。モデルの男に憐憫の情または同情を感じている識者に次のようなものがある— Jonathan Richardson (1722): ...he has a Rope about his Neck, which adds extremely to the Pity we conceive for him. (p. 301); Johann Joachim Winckelmann (1767): *Antiochus Epiphanes*, by ordering shews of Roman gladiators, first presented them with such unhappy victims; and custom and time, weakening the pangs of sympathizing humanity, changed even these games into school of art. (pp. 11-12); Pierre-Augustin Caron de Baumarchais (1773): A mind of sensibility must lament, even the most successful production of an artist, who could form his idea from the dying gladiator; pain from a man involved in grief and distress; or describe a situation like that of the

unfortunate Laocoon and his children devoured by the frightful serpents. Such scenes, though they might excite admiration in some, yet the humanized and tender heart turn aside from the bare view of them (p. 169).

### 【Ⅲ】 George Robert Chimmery,

#### *The Statue of the Dying Gladiator: A Prize Poem (1810) :-*

#### [1] 作者・執筆状況

ジョージ・ロバート・チヌリー (George Robert Chinnery): 不詳。 *New DNB* に記載なし。この作品は、1810年のニューディゲット賞 (Newdigate Prize) の受賞作品。ニューディゲット賞 (Newdigate prize): オックスフォード大学選出の国会議員ロジャー・ニューディゲット (Sir Roger Newdigate) により1805年頃から、オックスフォード大学の学部生を対象に始められた文学賞。当時はラテン語詩、ラテン語エッセイ、英語詩の3部門に分かれていて、毎年、大学から与えられたテーマで作文・作詩する。受賞作品の作者には、毎年6月にシェルドニアン講堂にて行われる卒業式で自作を朗読する名誉が与えられる。歴代の受賞者にはジョン・ラスキン (John Ruskin)、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold)、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde)、アンドルー・モーション (Andrew Motion) などがいる。

#### [2] 原文

Will then no pitying sword its succour lend  
The Gladiator's mortal throes to end,  
To free the unconquer'd mind, whose generous pow'r  
Triumphs o'er nature in her saddest hour?  
Bow'd low, and full of death, his head declines, \*  
Yet o'er his brow indignant Valour shines,  
Still glares his closing eye with angry light,  
Now glares, now darkens with approaching night.  
Think not with terror heaves that sinewy breast, --  
'Tis vengeance visible, and pain suppress; 10  
Calm in despair, in agony sedate,  
His proud soul wrestles with o'ermastering fate;  
*That* pang the conflict ends -- he falls not yet,  
Seems every nerve for one last effort set,  
At once by death, death's lingering pow'r to brave -- \*  
He will not sink, but plunge into the grave,  
Exhaust his mighty heart in one last sigh,  
And rally life's whole energy ? to die!  
Unfear'd is now that cord, which oft ensnar'd  
The baffled rival whom his falchion spar'd 20

Those clarions mute, which on the murd'rous stage  
 Rous'd him to deeds of more than martial rage;  
 Once poised by peerless might, once dear to fame,  
 The shield which could not guard, supports his frame;  
 His fixed eye dwells upon the faithless blade, \*  
 As if in silent agony he prayed,  
 "Oh might I yet, by one avenging blow,  
 "Not shun my fate, but share it with my foe!"  
 Vain hope! ? the streams of life-blood fast descend;  
 That giant-arm's upbearing strength must bend; 30  
 Yet shall he scorn, procumbent, to betray  
 One dastard sign of anguish or dismay,  
 With one weak plaint to shame his parting breath,  
 In pangs sublime, magnificent in death!  
 But *his* were deeds unchronicled; *his* tomb \*  
 No patriot wreaths adorn; to cheer his doom,  
 No soothing thoughts arise of duties done,  
 Of trophied conquests for his country won;  
 And he, whose sculptur'd form gave deathless fame  
 To Ctesilas ? he dies without a name! 40  
 Haply to grace some Caesar's pageant pride  
 The hero-slave or hireling-champion died,  
 When Rome, degenerate Rome, for barbarous shows,  
 Barter'd her virtue, glory, and repose,  
 Sold all that Freemen prize as great and good, \*  
 For pomp of death, and theatres of blood!

### [3] 日本語訳

誰もおらぬのか。憐れみの一太刀で、  
 この剣闘士の断末魔の苦しみを終わらせてくれる者は。  
 屈するを肯んぜぬ精神を解き放ってくれる者はおらぬのか。  
 沈痛の深みにある肉体に超克せる、あの高潔な精神を解き放つ者は。  
 下を見つめ、死相をたたえた顔が、うな垂れてゆく。 \*  
 が、憤怒の目もとには、勇気が輝き、  
 閉じかけた眼からは、怒気をはらんだ光が  
 せまりくる宵闇に放たれたかと思うと、また消えてゆく。  
 決して、あの逞しい胸に恐怖が高鳴っていると思うてはならない。  
 胸に宿るは、目に見える復讐の念、そして堪え抜いた苦痛なのだ。 10  
 絶望にあって冷静、苦悶にあって沈着に、  
 男の高邁な魂は、圧倒せんばかりの宿命と抗っている。

この苦しみで、この戦いも終わりとなる。が、未だ倒れてはいない。  
 全身の筋が、死を眼前にするや、最後の力を振り絞って  
 死に立ち向かうべく、身構えたかのよう。  
 崩れ落ちることは絶対にしない。墓の中に飛び込んでゆくのだ。  
 最後の息で、大いなる心を吐き出し、  
 命の力の全てを集め — 死んでゆくのだ。

\*

今では誰も恐れていないあの縄。かつて、止めの剣を  
 手控えてやった敵を縛った、あの縄。 20

今では音のしない喇叭。かつて、死闘の練り広げられた舞台で  
 勇猛果敢な行為へと駆り立てた、あの喇叭。

かつて、軽々と持ち上げられ、歓呼に浴した  
 あの楯が、今、主を護り得ず、その身を載せている。

男の視線は、役をなし得なかった剣に向けられ、  
 まるで、苦渋に満ちた無言の祈りを捧げているよう —

\*

「嗚呼、願わくば、報復の一撃を加えたいもの  
 「我が宿命を避けるためではない、それを我が敵と分かつたがために」と。

この望みの空しいこと。生血の滴りが増し、  
 身を支えている、あの怪力の腕も、萎えゆくは必定。 30

しかし、男は、決して、たとえ地に伏すと雖も、怯懦にも  
 苦悩のしるしを見せることを、潔しとはしないだろう。

悲嘆の呻きを漏らして、末期の息を汚すことはないだろう。  
 その苦痛は、死に臨んで、崇高、壮美の域に達しているのだから。

しかし、男の行為は歴史に名を刻まれるものではない。墓には、  
 愛国者が飾る花環もない。男の運命を慰めんがために、 \*

果たした務めをねぎらう言葉もなければ、  
 故国のために闘い取った記念すべき勝利を言祝ぐ言葉もない。  
 それでいて、彫像の作者ツェシラスに不滅の名声を与えたこの男 —  
 この男は名もなく死んでゆくのだ。 40

恐らくは、とあるカエサルが催した祝祭に華を添えるために、  
 この奴隷の英雄、この雇われ闘士は死んでいったのだろう。

ローマ帝国 — 退廃したローマ帝国が、野蛮な見世物のために  
 徳や名誉や心の平安を売り渡したのだ。

自由人が導んだ、偉大なるもの、善良なるもの全てを売って、  
 殺戮の饗宴、血塗られたサーカスを作ったのだ。 \*

#### [4] 語釈

- 1 Will then... : 死にかけている剣闘士を目撃している語り手が、周囲の人（＝読者）に呼びかけている、という想定。いきなり読者をドラマの真ただ中に放り込む叙事詩的手法（*in medias res*）。



- 4 nature: i.e. physical nature = body. 前行の mind の対立概念。
- 6 indignant: brow を修飾すると、Valour を修飾するとも解せる。
- 10 vengeance visible: Cf. 'darkness visible', *Paradise Lost*, I, 63. Milton を強く意識した表現を用いることで、この剣闘士がサタン的な復讐心を抱いた英雄となる。
- 14-15 = every nerve seems set (at once by death) for one last effort to brave death's lingering power.
- 19ff: cord (19), clarions (21), shield (24), blade (25) は、剣闘士の身の回りに散乱した状態で台座の上に彫られている。
- 27-28 "Oh might I...with my foe!": 復讐の一撃を相手に加えて、今、自分が直面している「死」を相手とともに分かちたい、の意。ここでは、share という語がキーワード。復讐欲を同情心で昇華させようとしている。Hayley, *On Sculpture*, III, 524 と比較すると、Hayley では像の観察者が同情を感じているのに対し、Chinnery では死んでゆく剣闘士自身が自分を殺した相手に同情をよせようとしている。Hayley が典型的な 18 世紀的 sympathy の表明であったとするなら、Chinnery では、18 世紀的 sympathy が、サタン的な vengeance によって変形し、方向が逆になったもの、と言えよう。
- 34 In pangs sublime, magnificent in death!: 死に直面した剣闘士の崇高を讃えた一節。Winckelmann が Laocoon 群像に認めた 'a noble simplicity and sedate grandeur' に通ずる (Winckelmann, pp. 30-39)。復讐心が昇華して、Winckelmann 流の崇高に到達した、と考えてよい。Richard Payne Knight によれば観察者は、Laocoon が経験しつつある苦痛に対してではなく、苦痛を耐え忍んでいる Laocoon の精神性に対して、同情を覚えている。胸と喉の筋肉の状態からすると、Laocoon は無言で苦痛に耐えているのであって、Virgil が表現しているように「牡牛のごとくに叫んでいる」のではない、という。(pp. 333-34)
- 35-40: 彫像の作者 (と Chinnery をはじめ当時考えられていた\*) Ctesilas が後代に名を残しているのに対して、モデルとなった剣闘士は名も知られていない。無名の人間の価値を讃えた一節で、このテーマは Gray, *Elegy Written in a Country Churchyard*, 29-56 に通ずる。さらに No patriot wreaths... ; No soothing thoughts... という否定語の使用も、Gray, *Elegy*, 21-24 を思わせる。これ以外にも、unchronicled (35) と storied (*Elegy*, 41), unlettered (*Elegy*, 81), trophied (38) と trophies (*Elegy*, 38) など、語句レベルでの類似も多い。(\*Ctesilas は Phidias と同時代の古代アテネの彫刻家。Pliny の『博物誌』に Dying Gaul の作者とされており、18 世紀後半ではその説が正しいとされていた。)
- 41-46: ローマ帝国の制度化された蛮行に対する義憤。18 世紀後半になると、こうした義憤を表明している例が多くなる。Joseph Barette (1781): Whenever I look upon this Statue, I cannot help being less affected by the visible perfection of a Grecian chizel, than by the inhumanity of the Romans. (p. 23); Rev. James Ramsay (1784): such representations as the Dying Gladiator, which exhibits the life of a brave useful man sacrificed, not to the safety of his country, but to the barbarous whim of, perhaps, the most worthless set of men that ever were assembled together in one place. (p. 22). Byron, *Childe Harold's Pilgrimage*, IV, cxli の最終 2 行も、この義憤の系列に入る。

引用文献

- Baretti, Joseph. *A Guide through the Royal Academy*. London, 1781.
- Baumarchais, Pierre-Augustin Caron de. *A Sentimental Journey through Greece, in a Series of Letters Written from Constantinople...by M de Guys ... Translated from French*. Dublin, 1773.
- Chinnery, Robert. *The Statue of the Dying Gladiator: A Prize Poem, Recited in the Theatre, Oxford July 3*. Oxford, 1810. なお、2010年11月4日現在Internet Archive (<http://www.archive.org/>) でこの作品を検索してヒットするものは、全く別の作品である。
- Haskell, Francis and Nicholas Penny. *Taste and the Antique*. New Haven, 1981.
- Hayley, William. *An Essay on Sculpture, in a Series of Epistles to John Flaxman*. London, 1800.
- Knight, Richard Payne. *An Analytical Inquiry into the Principles of Taste*. London, 1805.
- Ramsay, Rev. James. *Essay on the Treatment and Conversion of African Slaves in the British Colonies*. Dublin, 1784.
- Richardson, Jonathan. *An Account of Some of the Statues, Bas-reliefs, Drawings and Pictures, in Italy, etc. with Remarks*. London, 1722.
- Winckelmann, Johann Joachim. *Reflection on the Paintings and Sculpture of the Greeks*. tr. Fusseli [sic]. 2 ed., 1767.